

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

序文

タイトル(その他言語)	Prefacio
著者	竹谷 和之
雑誌名	神戸市外国語大学外国学研究
巻	91
ページ	1-3
発行年	2015-12-22
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001839/



序 文

竹谷 和之

「グローバルゼーション」は批評する立場によって功罪対立して把握されている。功に関しては、世界のどの地域でも通用する経済やテクノロジーがその代表である。規格化あるいは画一化と言い換えてもよい。一国や地域だけの価値規準から、「普遍」へと昇格するのである。ここにはバスに乗り遅れまいとする焦りから解放され、同じ方向へ向かう「仲間」入りという安心が得られる。

しかしその規準に馴染まない、あるいは受け入れることができない国や地域にとつては重大問題となる。まず「仲間」入りできないのである。したがって内部の法律や制度を改変し、「規準」に合致するように無理強いをしなければならぬ。その結果内部で軋轢が生まれ、つねに緊張した対立状態が続くことになる。具体的には、弱者の生活基盤を崩壊させるような新たな制度が構築されたり、金融が少数の強者へと流通していくことになる。つまり強者の論理で構成された「暴力」が形成されるのである。

これをスポーツ文化の問題へと転ずれば、何が見えてくるのだろうか。グローバル・スポーツの代表は近代競技スポーツであろう。これはオリンピック競技にも採用され世界の人々に知られているスポーツである。スポーツ名を聞くだけ

で、そのプレイやルールが想定され、活躍する選手名までも思い浮かべることができる。地域的価値が付与された伝統スポーツではないのである。文化的背景が異なる人々の間でも共有され、勝者を決定し、新記録も達成される。

この画一化の過程をよく考えてみれば、おかしなことに気がつくであろう。何を基準とした画一化なのであるのか、と。つまり見えない公準がそこには含まれているのである。前述の経済やテクノロジーの場合と同じく、宗教的あるいは地域的価値で構成されたスポーツを「普遍」近代スポーツへと創りかえて世界で共有されるのである。これを拒否すればオリンピックや世界選手権に参加できないだけでなく、スポーツを取り巻く環境からも距離を取ることにになり、置き去りにされるのである。そうすれば「世界中のアスリートと競う」という高揚感が絶たれ、夢や憧れといったものも縮小してしまうだろう。同じ競技者同士が頻繁に対戦することは、勝敗の行方も推測可能となり観客の興味も削がれる。

一方グローバル化過程で人間がコントロール不能となる現象が起きている。つまりスポーツ・テクノロジーの高度化、いいかえれば人間では判別できない状況を機械が代行することが正当化され、この方向性にストップがかけられないという現実がある。機械の方が正確でミスがない!!

たとえば、近年の硬式テニス判定はホークアイという機械に頼っている。選手は対戦相手が打ったボールのイン・アウトの審判判定に不服があれば、審判にではなく機械に「チャレンジ」する。そのスペクタクルなデジタル映像が絶対であり、その真偽のほどは闇の中である。

この暴走を許しているのがグローバル化である。スポーツのグローバル化はより上を目指す。とくに新記録が期待されるスポーツでは、身体は限界に達していると言われる。新記録達成へ向けた様々な方法が駆使され用意されている。用具や機械の発達に助けられての記録にはメーカー側も熱心に取り組む。なぜなら先行投資している競技者の好成績は、企業収益に直結しているからである。トップアスリートは企業と契約し、本人の状態にベストな用具をサポートしてもらう。企業はその成果を自社の宣伝に利用する、というような互惠関係が構築される。この関係が構築できないアスリートは、自力で記録を伸ばすしかない（本来はそうなのだが）。

また施設も記録が出るように工夫され、アスリートのパフォーマンスを助長する。これまでとは異なる運動環境が作り上げられ、これが「公準」に変化するのである。このようにつねにスポーツを取り巻く状況は変化し、そして経済とリンクしている。

画一化されたルールのもとでは、アスリートの身体は限りなくモノ化、サイボーグ化していき、ますます「人間機械論」（デカルト）の俎上でしか意味を持たなくなる。身体はパーツでできており、部分的鍛錬をすればよいという思考である。この延長上にはドーピングがあり、強力な薬が開発されればされるほど、身体汚染は進みまたその副作用で苦しむアスリ

ートも多いと聞く。かつての東ドイツでは知らない間に投薬され、その後遺症が重篤になり係争中の事例もあるという。現在このドーピングは低年齢化しており、発育発達途中の子供の身体が危機に晒されている。

前述の近代競技スポーツと距離をとっているのが伝統スポーツである。一つの文化圏だけで完結し、文化の異なる他地域ではこのスポーツは受け入れられないことはない。このことに関しては神戸市外国語大学・バス科大学第二回国際セミナー（二〇一二年八月六日〜九日）のテーマでもあった。当該セミナーでは伝統スポーツの変容や意味などの多くの事例が示され、グローバル化の功罪について言及された。そこではグローバル化に伴う変容が語られ、共存の道も模索された。

世界各地に伝承されている伝統スポーツは、それを支える人々が「よりよく生きる」ために考え出した一つの文化装置である。時代が変化しても「根をもつこと」にこだわり続けられる。この場合伝統スポーツはそれを支える人々との紐帯としての機能を果たしているのである。そして最終的には「スポーツとは何か」という始原への問いが立ち現れてくる。単に競争するだけでなく、人々を精神的に支える役割を持つスポーツとは何か、この根源は深い。世界各地に見いだすことができる伝統スポーツは、現在環境変化に伴ってその存立基盤が崩壊し、多くが消滅の危機に瀕している。

『宗教の起源』（バタイユ）においては、宗教が立ち上がる過程に注目される。なぜ宗教なるものが人々の間で共有され始めたのか詳しく述べられている。あるきっかけを境に

「横滑り」が生じ、ヒトは他の動物から離れていき、文明化したのである。それが道具の発明であった。稲垣は、自然現象への畏怖を回避するために創り出されたものがスポーツであった、と説明する。回避する時空間、方法、道具もすべて人々で共有されなくてはならなかった、と。それが徐々に変容し整備されて現在に至るが、年中行事の一部として、代理戦争として、長老選出方法として、成人式として、豊穰儀礼としてのスポーツは数え上げれば枚挙にいとまがない。しかしグローバル化から距離をとる伝統スポーツにも近代化の波は押し寄せ、独自の変容を遂げようとしているものもある。

ポスト・グローバル化社会という設定には、グローバル・スポーツの反省と伝統スポーツの今後とを見据えながら、人々にとって「善（西田幾多郎）」となるスポーツを模索したいと考えている。人間味豊かなスポーツ文化と言いかえても良い。その意味で「ポスト」とはテクノロジや経済中心のグローバル化の延長上で捉えるのではなく、グローバル化を脱構築し、より良き未来へ向けた新たなスポーツ文化考え

ることを目的とする。ここからさらに議論が深まることを期待したいと思う。

最後に、二年間の当該研究班の会合は合計二四回にも及ぶ。研究会は、東京、名古屋、大阪、神戸、奈良と毎月場所を変えて、また様々なゲストを迎えて行われた。本号執筆者はこの月例会で各自の発表を「エッジ」に立ちながら行いそして議論した。

この月例会研究会の中心が稲垣正浩先生である。最新情報をいち早く入手し、それをスポーツ文化思考へと練り上げられる姿は私たちへの叱咤激励であり、研究の方向性を示してくださっている。

稲垣先生は元本学客員教授（二〇〇九年～二〇一二年）でもあり、受講学生への影響はかなり強大であった。卒業生の中には講義シーンが今でも鮮烈に思い浮かべることができるといふ者もいる。

稲垣先生は今年三月で喜寿を迎えられた。本号が私たちのささやかなお返しになれば幸甚である。

二〇一五年五月三〇日